

「2005年大学生交流プログラム」 開催報告

■ ■ ■ 中村久美子（国際交流室 職員）

UNESCO アジア文化センターと東京大学の共催により、2005年11月7日から20日の2週間にわたって、東京大学本郷キャンパス～広島～白川郷を舞台に「2005年大学生交流プログラム」が開催された。テーマは「科学を通して考える宇宙・地球・愛」。

参加者は、交流協定を結んでいる韓国のKAISTと中国の復旦大学の学部生各5名に東京大学理学部の学生を加え、3カ国の学生15名。講演会・シンポジウム・セミナーなどに参加するほか、週末のホームステイで短いながら日本の生活習慣・文化・考え方などを体験した。2週目は広島へ移動し、原爆ドームや平和記念資料館の見学、広島大学主催の4

大学の学生によるワークショップで時間を忘れた熱いディスカッションなどが行われた。プログラムの最後には白川郷を訪れ、合掌の宿に実際に宿泊しながら今回のプログラムの目的と意義について話し合いがもたれた。アジアの大学生が集まり科学を通じた交流の中で、広い視野に立った地球環境・平和などを考える密度の高い2週間のプログラムであった。

ファンドを提供して頂いたユネスコ/ACCUに心より感謝すると共に、この企画にご理解を頂きさまざまなサポートをしてくださった理学系研究科、特別名誉教授の小柴先生をはじめ理学系研究科の諸先生方にお礼を申し上げたい。さらに、ご協力をいただいた多くの関連部署、多くの人々にも心より感謝の気持ちを贈りたい。



■ オープニングセレモニーの様子

理学系研究科・理学部教職員と 留学生・外国人研究者懇親会

■ ■ ■ 五所恵実子（国際交流室 講師）

去る2006年1月31日（火）午後6時からフォレスト本郷内フランス家庭料理店「ルヴェ・ソン・ヴェール」において大学院理学系研究科・理学部教職員と留学生・外国人研究者との懇親会が開催され、留学生・客員研究員とその家族、教職員、合わせて78名の参加者があった。会は岩澤康裕研究科長の英語による歓迎の挨拶と石田国際交流委員会委員の乾杯の音頭で始まり、温かく美味しそうな料理とよく冷えたビールやワインを片手にあちこちで談笑の輪が広がるなど、会場内はとて和やかな雰囲気に包まれた。

会後半には博士課程2年の中国からの留学生、フ・ゴンヨウ（Fu Guangyu,

付広裕）さんと、スウェーデンからの研究員、ニクラス・アンダース・ソリン（Niclas Anders Solin）さんによる見事な日本語によるスピーチが行われ、会場は拍手喝采であった。スピーチの後は参加者全員でクイズ形式のゲームを行い、全問正解者5名にはどれを選ぼうかと迷うくらいの豪華商品が贈られた。そして坂野国際交流委員会委員長による閉会

の辞が英語で行われ、全員で記念撮影の後、盛況のうちに閉会した。年に一度ではあるがこの懇親会を機に多くの交流の輪が広がることを願っている。



■ 参加者全員による記念写真

COE ワークショップ 「高エネルギー宇宙の収支勘定」

■ ■ ■ 牧島 一夫 (物理学専攻 教授)

「高エネルギー宇宙の収支勘定」(Energy Budget in the High Energy Universe) というユニークな標題のワークショップが、2006年2月22～24日に柏キャンパスで開催された。「収支勘定」といっても家計簿ではない。宇宙線の加速には、どんな天体現象がどこまで寄与し、それらは宇宙のエネルギーをどこまで担うのか、という問題提起である。会議の主催は本研究科の21世紀COEプログラム「極限量子とその対称性」、共催は宇宙線研究所と国立天文台である。

130余名の参加者の中には、ガンマ線のチェレンコフ観測の開祖ウィークス(Weekes)、ロシアの衛星観測を強力に率いる理論家スニャーエフ(Sunyaev)、ガ

ンマ線バーストが宇宙の果ての大爆発であると見抜いたメスザロス(Mészáros)など、教科書に登場するような巨頭たちが居並び、若手の参加者には身震いが出る体験だったに違いない。異なる手段の研究者たちが一堂に会することで、超新星残骸、活動銀河核、ガンマ線バースト、銀河団などが宇宙の加速器として絞り込まれ、この野心的な会議は大きな成功を収めた。日本からは「すざく」や

CANGAROO望遠鏡の成果、テレスコープアレイの建設状況などが報告され、十分な存在感を発揮できたといえよう。

会議の委員長は佐藤教授(物理学専攻)、事務局長は梶田教授(宇宙線研究所)が務め、宇宙線研究所、物理学専攻、天文学専攻が協力して運営に当たった。地球惑星科学専攻や国立天文台からも協力が得られ、部局や専攻を越えた取り組みが大きな功を奏した。



■ 特別講演するスニャーエフ(右)と、マイクを手に質問するウィークス(左)

キャリアガイダンス： 理学系出身者のキャリア形成と 男女共同参画

■ ■ ■ 初田 哲男 (物理学専攻 教授)

去る2006年2月21日(火)、小柴ホールで、東京大学理学系研究科・男女共同参画ワーキンググループ主催のキャリアガイダンス「理学系出身者のキャリア形成と男女共同参画：－5年後・10年後・20年後のあなた－」が開催された。講演者と演題は、倉本由香利氏(マッキンゼー・アンド・カンパニー)「研究者だけじゃない：ある理系女子院生のキャリアパス」、延與秀人氏(独立行政法人理化学研究所)「究極の三択、育児・業績・夫婦円満」、小林昭子教授(附属スペクトル化学研究センター)「私の子育て・教育・研究」であった。所属やキャリアの異なる3人の講演者のお話は、理学系出身者のさまざまなキャリアパスの可

能性、男女がどのように協力してキャリアを積んでいくか、その上での問題点は何かなどについて、経験に基づいたたいへん示唆に富むものであった。理学系内外からの約90名の参加者を得て、講演終了後も活発な質疑応答が講演者を囲んで行われた。



■ 倉本由香利氏の講演



■ 講演会場風景

第5回理学系研究科諮問会が開催される

山本 智 (物理学専攻 教授)

去る2006年3月3日(金)に、第5回理学系研究科諮問会が行われた。理学系研究科では2001年度から諮問会を設け、各界の有識者に研究科の運営に関する意見をうかがっている。

現在の諮問委員会は茅幸二委員長(理化学研究所中央研究所長)、荒木浩委員(東京電力顧問)、久城育夫委員(東京大学名誉教授)、郷通子委員(お茶の水女子大学学長)、浜本育子委員(ルンド大学名誉教授)、尾関章委員(朝日新聞科学医療部長)で構成されている。理学系研究科からは、岩澤研究科長、山本(正)副研究科長、塩谷研究科長補佐、武田研究科長補佐、山本(智)研究科長補佐、川島環境安全管理室長、榎森男女共同参画WG委員長、松浦次期副研究科長、および事務方から平賀事務長、神山副事務長が出席した。

諮問会に先立ち、約1時間にわたり、地球惑星科学専攻の研究室の見学が行われた。はじめに茅根助教授にサンゴで探る過去の気候変動の研究について説明を受け、サンゴがつくる「年輪」に含まれる微量金属元素や酸素同位体の分析から過去の降水量の様子を知ることができ、それをもとにインド洋の過去のエルニーニョ現象を復元する試みがなされている



■ 諮問会の様子

ことが紹介された。次に、COE「多圏地球システムの進化と変動の予測可能性」で推進している4次元シミュレーション可視化システムを見学した。立体視のための眼鏡で見ると、東アジアから汚染物質がどのように流れているかをさまざまな角度から眺めることができ、委員からは活発な質問が飛んでいた。

その後、開かれた諮問会では、理学系研究科のおかれている現状、21世紀COEの活動、広報活動、男女共同参画、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ、学生支援室の活動、技術部の設置など広範なテーマについて意見をいただくことができた。

法人化後の経費の削減、とくに5年間で教授換算10名の定員減という現状に対し、委員からは大きな危惧が示された。広報活動については、理学部ニュースはとてもよくできていること、そして、ぜひ駒場生へ配布するとよいというコメントをいただいた。男女共同参画のあ

り方についても広範な議論があり、理学系でできる対応を取っていくという点で育児支援室の設置などはたいへん重要であるとの指摘をいただいた。また、職員の出産・育児に対して大学として経費を投じて支援していく必要があることが強調された。一方、法人化に伴い、環境安全に関連してさまざまな法的規制がかかるようになっている現状について、高圧ガスボンベの取り扱いなどを例に議論があった。これらに関して、大学の特殊性に鑑み、大学側から安全確保のための提案を出してみてもどうかという意見が出された。

話題はしばしばわが国の学術行政のありかたにまで広がり、あっという間に予定されていた時間となった。わずか3時間程度の短い時間ではあったが、上記をはじめとする貴重な意見をうかがえたことは、今後の理学系研究科の運営に大きなプラスとなると思う。



■ 地球惑星科学専攻の研究室見学の様子。左：茅根助教授による説明。右：4次元シミュレーション可視化システムの見学。

「理学系大学院教育先導プログラム」プレ講義開催

■ ■ ■ 塩谷 光彦 (化学専攻 教授)

理学系研究科は本年度、日本学術振興会が先導する「魅力ある大学院教育」イニシアティブの一拠点として採択され(取組代表者: 岩澤康裕理学系研究科長, 取組実施担当者: 塩谷光彦理学系教務委員長), 未踏領域を開拓できる国際的研究リーダーや多様な科学技術社会を先導



■ 横山広美氏の講義

できる人材の育成を推進している。本プログラムの一つの新しい試みとして、2006年3月2日小柴ホールにおいて、2006年度から本格的にスタートする先端科学技術と先端理学コミュニケーションのプレ講義が行われた。講師は、外部の専門家として、塩野悟氏(神戸大学・元三菱電機先端技術総合研究所), 横山広美氏(総合研究大学院大学/サイエンスライター), 保坂直紀氏(読売新聞東

京本社編集局科学部)をお呼びした。大学院生約80名を含む100名の参加者が一同に会し、熱意のある講義と活発な討論が行われた。来年度からの新しい教育プログラムの開始にあたり、たいへん良いスタートを切ることができた。

IPEGSS ホームページ

<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/ipegss/>



■ 質問を寄せる参加者

松井泰助手ご一家の逝去を悼む

■ ■ ■ 東江 昭夫 (生物科学専攻 教授)

2005年12月29～30日、松井泰さん一家4人が事故により逝去されました。松井さんが年末の休暇に入る旨を連絡にみえた時、誰がこのようなことが起こると予想したでしょう。ご遺族の方々の心中を察するに余りあります。

松井さんは本学生物化学専攻の修士課程を修了後、三井化成総合研究所(当時)に就職され、在職中に、動物細胞における低分子量GTPaseの研究で東京大学において理学博士の学位を取得しました。生物学の基礎研究分野に身を置くべく、退職して生物科学専攻の助手に赴任されたのは1990年4月でした。学位論文執筆中に興味をもった低分子量GTPaseの作用機構について、この問題を解明す

るには酵母の遺伝学によって基本概念を確立するのがもっとも早道だと考え、私共の研究室で研究することに決めたというものでした。研究は順調でした。

松井さんは自分の研究を進めながら、多くの学生の研究の相談相手になり、的確な助言と励ましで学生から信頼されていました。今は海外で研究員として活躍している卒業生から松井さんの訃報を悼む声が寄せられています。また、松井さんは研究室の新メンバーの歓迎会や実習の打ち上げのときなどには中心になって座を盛り上げてくれ、料理に腕をふるいました。お好み焼きをつくるのにも松井さんは即興の工夫を試していたのを思い出します。

松井さんの奥様、理恵さんは客員研究員として、研究室の諸事を分担しながら、松井さんの研究を補助していました。理恵さんは研究の面でも松井さんのもっとも信頼できる協力者でした。松井さんは、



■ 故・松井泰助手

ご家庭にあっては優しく、また一方では厳しい父親であったようです。ご夫妻は二人のご息子を慈しんで育てていました。ご家族で温泉を楽しみ、新しい年を迎える準備も整っていたと思われるときにまさかのこの事故とは。松井さんご一家を失った私たちの悲しみは深く、2005年の暮れを忘れることはないでしょう。

ご冥福をお祈り致します。